

X線CTで受託検査

マークテック

4装置活用、粉体評価も

高度な内面検査需要対応

アルコニックスグループで非破壊検査装置やマーケティング装置を手掛けるマークテック（本社＝東京都大田区、西本圭吾社長）は、新たにX線CT（コンピュータ断層撮影）などを用いた受託検査サービスを開始した。各製造分野で高まる高度な内面検査・測定ニーズを捕捉する。同社はアルコニックスグループの大羽精研などと連携して、提案から測定結果まで一気通貫なサービスを実現する。検査装置は種類別に4台をラインアップ。西本社長は「4～5年以内に本事業を軌道に乗せたい」と意気込む。

同社は主に鉄鋼メーカーが表面探傷検査などに用いる非破壊検査装置と、鉄鋼製品への印字・マーキング装置の国内トップメーカーだ。現在、非破壊検査関連ビジネスの拡大に注力。これまでタイで展開してきた受託検査サービスを充実させ、日本でも4月から本格リリースした。

同検査サービスはアルコニックスグループの大羽精研が保有する検査装置を活用し、シナジーを発揮。工業用X線CTシステム大手の独コメット・エクスロンとも連携する。次世代技術を手掛ける企業もパートナーに迎えた。マイクログローン型の電子加速器を活用した技術を有する企業のみならず分析セン



受託検査で使用するX線CT装置

ターだ。工業用X線CTシステムの中でも高出力かつ高透過能力を持ち、厚い金属内部の検査も可能とした。粉体技術を手掛けるナフシズもパートナー。同社は粉体測定におけるエキスパート企業

業。電気自動車向け全固体電池などで必要とされる粉体測定装置を展開し、粉体を多角的に評価する。既に多くの引き合いがあるという。

同装置はマークテックがOEM（相手先ブランドによる生産）生産する予定。電池以外にも、3Dプリンターなど高度な粉体技術を要する成長分野での活用が見込まれる。西本社長は「従来とは異なる検査技術で、全体的なブルーオーシャンと期待する」。

近年、半導体の微細化や自動車の電動化などの進展により、内面検査・測定の高精度化が求められている。さらに次世代電池や3Dプリンターなど成長分野での需要も高まっている。また、検査装置の価格は億単位と高価な上、有資格者のオペレーターへの教育も必要。そのため、受託という形とすることで、X線CTスキャンなどのハードルを下げる狙いだ。検査装置の販売にもつなげたい考え。量産時の検査はスピードが求められるため、超音波探傷検査装置に切り替えることも可能だ。顧客製品の実用化に向け、シームレスな提案を行う。西本社長は「X線CT検査の垣根を下げ、日本のものづくりに貢献したい」と話す。